

長崎新聞

発行所
長崎新聞社
長崎市茂里町3-1 〒852-8601
©長崎新聞社2017

3月8日(水) 赤口

(旧暦2月11日)

総合案内(095)844・2111
報道部(095)846・9240
広告部(095)844・4874
事業部(095)844・5261

私たちの最期は

〈6〉

第8部 旅立ちの介護

サービス付き高齢者向け住宅、略して「サ高住」。サービス付き高齢者向け住宅、略して「サ高住」。60歳以上を対象としたバリアフリーの賃貸住宅だ。国が2011年に高齢者住まい法を改正して整備を旗振り。各地で建設ラッシュが続き、今や全国で21万戸を

超す。

千葉県鎌ケ谷市のサ高住「銀木犀鎌ケ谷」はみとりの実践で知られ、同業者がしばしば見学に訪れる。「『どうやって』と聞かれるけど、マニュアルがあるわけじゃない」と所長の松丸晃一郎(50)。「入居者と家族に教わりながら続けているようなもの」と話す。

割高な有料老人ホームと、費用は安いが入居待ちの多い特別養護老人ホーム。その隙間のニーズを埋める形で人気を集めるが、分類は施設ではなく、あくまで住宅だ。みとりの態勢を

サ高住が「ついのすみか」



「銀木犀鎌ケ谷」の食堂で入居者と談笑する所長の松丸晃一郎
= 2月、千葉県鎌ケ谷市

東京都心から20^キ余りのベッドタウンにある銀木犀鎌ケ谷は3階建て。1部屋18・49平方メートルで、計53戸は常にはぼ満室だ。安否確認・生活相談サービスを提供

するほか、緊急時に備え介護職員が24時間常駐。敷地内に駄菓子屋を設け、近所と交流しているのが特色だ。

所長の肩書ながら「何でも屋」を自認する松丸は元広告マン。父親が病気になるのを機に20年以上勤めた広告会社を退職し、介護の世界に飛び込んだ。老人保健施設でヘルパーとして約1年間働き、5年前から現在の職に。身近な人の死を経験したのは同居していた祖母くらいという。

「人が住まいで亡くなるということに最初はどうもたらいいか分からず、内心びくびくしていた」と話す松丸だが、これまでに入居者約30人をみとってきた。1年以上おむつだったのにトイレで排尿して間もなく息を引き取った男性。「ありがとう」と声を掛けると涙を一筋流し、呼吸が止まった女性。自宅を売却し、ここを「ついのすみか」と思い定めて入居してくる人も多い。思いに応えようという覚悟を決めた。

15年秋に90歳で亡くなった田谷野きみは忘れられない入居者の一人だ。笑みを絶やさず、掃除好き。酒とたばこを手放さなかった。近所の子どもとも顔をじみで銀木犀の「顔」だった。

同年初め、きみは脳梗塞を発症。家族は施設に移すことを考えていた。だが松丸は「待っててください」と再考を迫った。

(敬称略)